



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	帝国主義の統治理性（2・完）　－チャールズ・キャニングとインド大反乱－
Author(s)	中村, 研一; NAKAMURA, Ken'ichi
Citation	北大法学論集, 36(3), 101-131
Issue Date	1985-10-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16494
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(3)_p101-131.pdf



帝國主義の統治理性（二・完）

——チャールズ・キヤニングとインド大反乱——

中
村
研
一

ま え が き

一節 統治者の形成

二節 確信の統治

以上前号

三節 統治目的の喪失

以下本号

四節 使命の終焉

大反乱の戦局は、反乱側の拠点デリーとラクノーの陥落とともに終息に向いはじめた。一八五八年春以降、インド人支配層の間に武力による英国支配の打倒は絶望的だという認識が広まり、英国人指揮官たちも、大反乱が民衆反乱的な性格を失ったことを次々に報告している。執拗な抵抗を展開してきたオードのタルクダールなど地域有力者たちも、英国側との軍事的な対決を避け、できるだけ良い条件で和平を取り結ぶ糸口を模索しはじめた。そこでなお抵抗を継続したのは、反乱政府の中核を担った伝統的支配層、ベンガル反乱兵の精強な部分、そして、秩序の崩壊に乗じて勢力を伸した盗賊・義賊の三つのグループに限定された。これらの集団から軍事的に攪乱されながらも、英国側は、反乱発生地域の有力者たちに対する政治的な働きかけによって、支持の調達を行い、彼らを英国支配の下に再編する作業を開始しはじめた。換言すれば、反乱の鎮圧の過程は、統治の再建に結びついていたのである。

この反乱の平定によって、英国側にもインド側にも、英国の支配は軍事的には打ち破ることはできず、その統治機構は鉄壁のような強靱さを持つという神話がつくりあげられることになった。しかし、反乱の終結は、単なる旧来の統治の回復に止まりえなかった。なぜなら、この大反乱は、統治する側の英国人に大きな衝撃をあたえ、彼らのインド支配については異民族支配全般に対する意識を大きく変容させたからであった。一八五七年から五年間の間に、インド大反乱1に關し、実に五〇〇冊以上の本が出版されたことは、インド大反乱の英国人にあたえたショックの深さを示している。

シーリー (John Robert Seeley) の著名な表現の通り、十八世紀以来のインド植民地の膨脹は、本国の人々にとって「2うわの空の出来事」であった。人々はインドについて詳細な知識を持たず、インド問題を深刻な政治争点とは考えず、少数の例外を除いてインド支配に危機が近づいているとは思ってもみなかった。大英帝国には神の祝福が下され、万人が

英国人を愛していると想定されていたのである。

ところが、大反乱の発生によって、インドは、突如、英国人の生命と帝国の存立を脅かす具体的な存在として立ち現れた。「インドからのニュースによって、ロンドンでは前例を見ないような深刻なパニックに襲われた。その理由は何か。全くわからない」とグレレンヴィルは、混迷の深刻さを記している。クリミア戦争の報道によって一躍有名になったウィリアム・ラッセル(William H. Russell)をインドに特派した『ザ・タイムズ』紙を筆頭に、新聞は、一八五七年の夏から秋にかけて、連日のようにインドの戦局を報道した。その基本的な論調は、狂暴な異教徒に対する人種的・宗教的な聖戦論であった。「今、インドで闘われているような戦争は、何ら刺激を与えなくても戦慄をかきたてる」とデイスレイリーは語っているが、このような興奮に新聞報道は拍車をかけ、インドに関心を寄せる人々の数は、「国民的」といえる規模にまで拡大したのである。

ここで注意すべきなのは、英本国とインドとは、反乱後の統治を構想する出発点となる政治的リアリティーが根本的に異なっていたことである。ヴィクトリア初期のロンドンでは帝国の大義と力とは疑われることなく、大反乱によって帝国への確信が失われることもほとんどなかったが、大反乱の現実をくぐり抜けたカルカッタでは、「鎮静化」の願望と力の限界の認識とが、統治全体の流れをつくる慣性力として働いたのである。キャニングの統治者としてパースナリティーの中核をなした資質、即ち、情熱に動かされることのない冷静さ、合理的であると判断したことに自分自身を従わせていく確信と自己統制、それに自虐的とさえ形容しうるような職務への献身などは、同時代の統治層にかなりの程度共通したものであった。そのようなキャニングが、大反乱後の支配の再編の過程で、ロンドンの世論としばしば大きく乖離しながらも、インドにおいて、統治の安定にもつばら着目した支配様式を組織化していくことができた大きな理由は、彼がインドの英国人統治層の政治心理を代表していたからにほかならない。

大反乱の鎮圧の過程で、英国人行政官の合言葉となったのは「鎮静化」であつた。反乱の現場に帰任していった行政官たちが、その土地の有力者の態度から、すくなくとも表面的には、敵意が消えていることを確認して報告する言葉は、「昔の静謐が戻つた」という安堵の声である。また、戦時の興奮から、電報の開封と起草にあけられる日常に帰つたカルカッタの行政官も「インド人の心の鎮静化せよ」と、繰り返している。つまり、大反乱の悪夢を再びよびおこさない、ということが彼らの至上命令であつた。このような「鎮静化」の願望は、キャニングの「賢明であれ」という指示と共鳴しあつて、消極的で効率主義的な政策をとる心理的な背景となつた。すなわち、インド人の反発を招かないように、彼らの伝統、慣習、宗教などへの介入を避けるべきだ、という見方がカルカッタで支配的になつた。ロンドンにおいても、ディスレイリーやエレンボローなどの保守党政治家によつて、インドにおけるキリスト教布教活動やインド政庁の急速な改革政策の展開が、大反乱の原因であると主張された。このような見方は、インド省の高官で後にインド大反乱の公定歴史書を著わしたジョン・ケイ(John W. Kaye)の「インド人の心の内側から本来育まれてくるはずの意識の変化を、外側から望ましいと思う方向に強制すべきではない。そのまま放置すべきだ、とはいわないまでも、変化を助ける、という程度に止める方が、現在のところ賢明である。」という言葉に要約されよう。

ここで最大の争点となつたのは、宗教政策であつた。キャニングは、インド人の反発を避けるために政教分離とインド政庁の宗教への不介入を原則としてかけ、それを宗教的自由の名のもとに正当化したが、それはインド支配を安定化させるために必要であるという判断にもとづくものであつた。しかし、このようなキリスト教化に対する消極的な対応は、異教徒に対するキリスト教化Ⅱ文明化という帝国の大義と正面から衝突した。

ロンドンの多くの英国人にとつてインド大反乱の発生は、たんに予期しえず説明不能であつたばかりでなく、道義的、宗教的な異常事態とみなされてきた。ケンブリッジの宗教文筆家チャールズ・キングスリー(Charles Kingsley)は、そ

の衝撃を次のように語っている。

「この(インド反乱の)半年に説明がつけられないのならば、インドの現状と将来について何も言わないでほしい。……この間、私はキリスト教の教義を語ることができなくなりましたように感ずるのだ。私の頭の中に、あの地獄と修羅場のイメージが湧れ出てくる間は、教義を考える気持になれないのだ。」

ここには、聖書の教えを世界に伝播していく大英帝国とその導きの手によって文明化されていくインド人、という調和的な世界観は崩壊し、宗教的な混乱に落ち入っている様が、卒直に語られている。とりわけ人々の憤激の火に油を注いだのは、捕虜となった約二百名の英国人子女を含む多数の人々が殺された「カウンプールの虐殺」であった。シャフツベリーは、「生れながらの悪魔であるインド人によって、凌辱され、拷問され、殺戮されつつある救いのない子女たちを、形容しえないほど残酷な敵から守り、その攻撃を防ぎ、救い出すように」と神に祈っている。彼は、また、極めて精力的にインド反乱を非難するキャンペーンを行い、インドでは英国人の婦人たちは耳や鼻を削ぎ落され目をえぐられ、子供たちは両親の目の前で拷問にかけられているという類の、虚偽の情報にもとづく煽情的な演説をする有様であった。このような彼らのとりみだした反応に示されるように、改革運動のうけた衝撃は大きかった。トマス・マコーレー(Thomas Babington Macaulay)は、「平和協会からも原住民保護協会からも刑罰改善協会からも、博愛主義の標語が消え去ってしまった。三週間ほど前までは、あらゆる類の死刑に反対していた人々が、カノン砲の口から四〇名のインド反乱兵を、弾頭のように発射し、頭や手足をバラバラに吹き飛ばす恐るべき処刑に喝采を送っている」と述べ、「その気持も理解できる」と付け加えている。この突然の混乱をデイスレイリーは「キリスト教の前に頭を垂れるかわりに、人身御供の血祭を甦らせようとしているかのようだ」と評している。

しかしながら、インドに約三五〇名の宣教師を派遣していた英国の各宣教会にとって、大反乱の勃発は、彼らの活動

に人々の関心を引きつける絶好の機会であった。彼らは、インド政庁がこれまでキリスト教化という本来の使命を閑却してきたために反乱が発生したのであり、今後は、インド支配において宗教的な課題に正面から取り組むべきである、と宣伝した。¹³ インドのキリスト教化を徹底せよという彼らの主張にとって、もっとも有力な論拠になったのは、パンジャブの行政官たちの活動であった。すでに述べたように、パンジャブでは、反乱発生の危機が極めて深刻であったにもかかわらず、事前に反乱を抑圧することに成功した。¹⁴ そのパンジャブでは、それまで、キリスト教の布教活動に熱心な英人士官が数多く存在し、インド兵に対して聖書の説教を行うなど、宗教的な使命に比較的忠実であった。それらの士官の観点からは、パンジャブが、北インドの中で反乱の勃発を奇跡的にまぬがれることができた理由は、英国の行政がキリスト教の布教に熱心であった事実に求められた。つまり、キリスト教教育の徹底化こそが、統治を安定させる方策だと解釈されたのである。その中でもキリスト教化を最も先鋭に提唱した、ベシヤワの行政責任者ハーバート・エドワーズ (Herbert B. Edwards) は、一八五八年に「英領インド政庁から非キリスト教的な原則を一掃するために」というパンフレットを配布した。さらに、彼は一八六〇年には、エクセター・ホルルの英国国教会の福音派の集会で次のように語っている。

「(大反乱の)諸事件から、神の声が聞えてくる。神はこう語っておられる。『私がインドを英国の手に下したのは、その一億八千万の人々に恩恵を与えるためであった。その使命は、汝ら英国人が聖書の光と真実の神であるキリストの教えを、この異教徒に伝えることであつた。ところが汝らはこの使命を怠つた。……そこで私は汝らを懲した。しかし、その罪を許した。他の誰もが汝らを救えない時、私は汝らを救済した。今いちど、この人々を汝らの手にゆだねる。』……この神の警告に耳を傾けなければならない。キリスト教化政策こそが唯一の希望の政策なのだ。』¹⁵」

彼らは、インドの公立学校に聖書のクラスを設けることなどを主張した。さらに、パンジャブの地方長官で、大反乱

鎮圧の功労者ジョン・ローレンスも、キリスト教教育の強化という主張を支持し、また、英本国の政治家の中にもその動きを支援したものがあつた。そのため、インド政策の当局者、とりわけ、インドのキャニング総督とロンドンのインド担当相とは、彼らの圧力にさらされた。ダービー内閣のインド担当相スタンレーは、福音主義者の活動を「ファナティック」と公言して、彼らの反発をうけ、そのためデイスレイリーより「英国の宗教階級の好意と共感を得ることは、インド現地人と和解することと同様に重要なのである」と忠告される有様であつた。また、スタンレーの後を襲つたチャールズ・ウッド(Charles Wood, the 1st Viscount of Halifax)も、キャニングの宗教への不介入政策が「聖人たちを不必要に激怒させない」¹⁷⁾ように、配慮を求めている。

それに対してキャニングは、「ジョン・ローレンスの口を封ずるべきだし、エドワーズは頭をそつた方がよい。エドワーズはまるでメッカにはなくクレバムに生れたモハメッドのような奴だ」¹⁸⁾と非難し、パンジャブの行政官たちの宗教活動に棒をはめようと試みた。実際、インドにおけるキリスト教布教の状況は、英本国の希望的観測から、遠く隔つていた。人口一億五千万人に三百余人の宣教師が任命されているにすぎず、布教が成功しているのは二つの地域に限られ、改宗者は約九万人に止まり、しかも下層カーストの改宗者が大多数で、エリートへの浸透は困難であつた。たしかに、西欧文明の息吹とキリスト教の平等思想は、上層カーストの若いヒンズー知識人の心を大きく揺り動かし、カルカッタなどでは英語による西欧教育への関心は高かつた。しかし、彼らの大多数は、キリスト教の宣教活動に應戦して活発化したヒンズーやイスラムの改革運動に共感を寄せることが多く、キリスト教の衝撃は、インドの在来宗教の活性化にはつながつても、知識人の改宗が飛躍的に進むことはなかつた。宣教師の間にも、人材不足や布教の困難を訴える声も大きく、聖書教育を実施しようにも、そのための教師にこと欠く有様であつた。また、キリスト教教育を現地人に委ねることに對する危惧も大きく、キャニングは、副官の一人であるフレデリック・ハリデー(Frederick J. Halliday)より、「宣

教師たちが実際の経験から割り出した原則は、聖書はそれを信じていない人間によって教育されるよりは、全く教育されない方がましである、というものである¹⁹⁾という報告を受けているほどである。そして、カルカッタのビショップ、ジョージ・コットン (George E. L. Cotton) やええも、インド人の中に「猜疑心や悪感情が支配的である現状では、公教育に聖書教育を導入することは、かえって逆効果である」と述べている²⁰⁾。

このように、インドにおける福音活動は、パンジャブ行政官の一グループの熱意にもかかわらず、大きな壁につきあたり、布教を拡大する決め手を欠いていた。さらに、英本国においても、一八六〇年代には世俗化の傾向が、従来の非国教徒や異教徒に対する寛容の是非という古い問題の枠を超えて拡大し、絵画・建築・生活様式、そして政治行動にまで一つの流行となって浸透しはじめた。インド大反乱の直後に、いったん昂揚したインドへの宣教のエネルギーも、徐々に停滞を余儀なくされていったのである²¹⁾。英本国での各宣教会への献金、新たにインドにおもむく布教の志願者、集会の出席者などは一八六〇年代には頭うちになり、低下の傾向もみられた²²⁾。パンジャブでさえ、宣教師が十分に充員されなかったのである。そして、インドの統治政策に関して、福音主義者は無視しえない圧力団体として活動を続けたものの、決定的な比重を持つには至らなかった。そして彼らは、「鎮静化」を「キリスト教化」より優先させるキャンピングに指導されたカルカッタの統治層の政策をくつがえすことはできなかった。なぜなら、大反乱を体験したインド統治層にとつての至上命令は、異教徒に対して敵意を表明して改宗を迫るのではなく、被治者に対する和解の意志表示を行うことであつたからである。

キャンピングにとつても、「カウンプール」の事件は、痛ましい傷跡であつた。事件の報告を受けた夜、彼は一晩中総督の館の大理石の間を歩きつ戻りつしていた、といわれている²³⁾。反乱の余波もおさまつた一八六一年に、彼はカウンプールに慰霊碑の建築を計画し、グレンヴィルを通じて英本国に彫像の創作を依頼した。ところが、その碑のデザイン案が

「殺害された子供たちの骸の傍で十字架にすぎる婦人」という類のものである、と知らされたキャニングは驚き、グレインヴィルに即座に次のように書き送っている。

「その種のデザインこそ、私が是非避けたい、と思っていたものに他ならない。そのような碑では、遺族にとつて、痛ましさを永続させるものになり、また同朋の英国人、例えば兵士たちにとつても、憤激を呼びさますものになってしまう。また、現地人の目の前に一八五七年の生々しい地獄図を思い浮ばせるような像を、常時置いておくことが望ましいとも思えない。……生々しい現実ではなく、天使とか護民官の精神のようなものが表現されるべきなのだ。」²⁴⁾

ここからキャニングが、過去の「生々しい現実」を再び呼びおこすことなく、「天使か護民官」の姿を借りて、新たなインド統治を演出しようと試みたことを読みとりうるであろう。

大反乱後のインド在住の英国人統治層に共通した、今一つのモチーフは、力の限界認識とそれにもとづく権力の自己抑制である。つまり、統治のための課題は、異民族支配を安定化させ継続していくことに他ならず、そのためには、それまでのインド支配の目標であった「キリスト教化」「社会改革」「貿易の自由化」などは、当分の間背景に退いた。さらに、キャニングの着任直前に最高潮に達した支配地域の拡大という目標も、藩王国を併合するための名目であった「失効原理」を「女王宣言」によって放棄したことなどによって、断念された。キャニングはロンドンにあてて、「(ロンドンからは)インドがいかに変わったかは想像もできないでしょう。我々は攻撃し前進する力から停止した力に変わったのです。」と書き送っている。

思いもかけぬ規模に反乱が拡大していく過程で、英国人統治者がひとしく直面した危機感、膨大なインド人民衆がすべて敵にまわり、「大海の真直中で難破した船の乗組員のように、異人種の大群に取囲まれた少数者」²⁵⁾になってしま

という恐怖心であった。それは、信頼を寄せた部下や、昨日まで恭順であった地域有力者からいつ裏切られるかも知れない、という不信感と、本国から支援を得られないという孤立感とによって、一層強いものになった。しかも、カウンプールでは現実に惨事が発生し、ラクノーでは、每晚五件か六件の葬式の銃撃の中でとり行わねばならず、約五〇〇人の英国人子女のうち六六名が栄養不良や病気で死んでいくといった、文字通り死と隣りあわせの籠城戦が続いたのである。²⁷⁾

反乱鎮圧のための人的コストも甚大であった。例えば、反乱の拠点デリーに対する攻撃では司令官が続々と倒れ、最終的な総攻撃は十二日間に及ぶ白兵戦となり、英国側約八〇〇〇人のうち一六七四名が死傷するという、惨憺たる損害を伴ったのである。この死傷率は、被害の大きいとされたクリミア戦争の約二倍に達し、ラクノーの攻防戦もほぼ同様の損害を出している。兵員の量的劣勢に対して、英国側は通信と機動力で優越していたが、馬に依存する機動性にも大きな限界があった。広大なガンジス流域一帯で、同時多発的に反乱が生じたために、たとえ帝国全体を巨視的に見れば英国側が軍事的に優越していたとしても、局地的・短期的には反乱側が優位に立つという事態が生じたのである。²⁸⁾

このような力の限界にもとづく恐怖感²⁹⁾は、少数者による異民族支配に本来的につきまとうものであった。たとえ反乱を鎮圧した後でも、不安の根源である圧倒的な量の被統治者を消し去ることはなしえないために、恐怖は少数者である植民統治者の心理に定着し、その後過剰なまでに用心深い戦略をとる一つの誘因となった。つまり、可能なかぎりインド人社会の深みに立ち入らず、そこにやむをえず干渉しなければならない場合には、できるかぎり植民統治者は特定の勢力にコミットすることを避け、公正な仲介者の役割を果たしているかのように振舞うという戦略である。こうして現地社会から超越した姿勢に、英国人統治者たちは自らを押しやったのである。例えば、チャールズ・ウッドは「私はいかなる藩王にも、その領土の内部では藩王がかつて好んでいたような統治を勝手に行わせるつもりだ。もしも、彼の領土内の事

態が近隣にまで及ぶならば、それは不法な妨害であるから干渉すべきである。しかし、(藩王国の内部で)たとえアナーキーと流血の状態が長く続こうとも、それが内輪のけんかのようなものであるならば、干渉するつもりはない」と述べている。このように、現存する権力構造を温存し利用しながら、それを浅く掘み、秩序を維持していく戦略がとられた。

のみならず、キャニングにとつて、インドの伝統的支配者は、英国の力の限界を補うものと意味づけられた。彼は、大反乱の帰趨を決定した重要な政治的要因の一つは、インド人支配層の動向であると解釈していた。前任者ダルフージーの併合政策のもとでは、やがて消え去るべき遺制にすぎない、と考えられていた伝統的支配層は、大きな政治機能を發揮した。英国側の目からは、年金生活者にすぎないデリーのムガル皇帝は、反乱者にとつては政治的な結集の中核とみなされ、反乱側が多くの支援者を動員していくための象徴として、大きな意味を持った。さらに、「失効原理」などによつて併合される運命にあつたはずの藩王国は、キャニング自身の言葉によれば、大反乱の拡大の過程で「もしもそれなしには、単一の巨大な波となつて我々を押し流したであろう嵐を、分断する防波堤」の役割をはたした。また、大反乱の中心となつたオードでは、いったんは反乱側に投じた土地貴族タルクダールが英国側に帰順しはじめたことが、反乱平定の分水嶺となつた。そして、ベンガル周辺では、英国側の援軍がとどこおりなく通過でき、加えて反乱鎮圧の財源を期待しえたのは、ベンガルの地主・富裕層が英国側に敵対しなかつたという事実にもとづいていた。

それに対して、インド人民衆はどのように反応したのであつたか。オードのインド人小農民については現地の指揮官とキャニングとの間に意見の対立があり、キャニングがどこまで彼らの動向を正確に把握していたかについては、疑問もあるが、彼の認識は、オードにおいて英国側が育成しようとした「自営農民層」の行動を観察し、「その一人といえども、彼に対して友好であつた政府(インド政庁を指す)に対して、あえて忠誠を守ろうとしなかつた」というものであつた。即ち、キャニングの観点からすれば、伝統的支配層から土地所有権と権力を剝奪し、それを小農層に分配した

説
のであるから、彼らは英国の支配から利益を受けており、伝統的支配層を中心とした反乱に反対の声をあげてしかるべきであった。ところが、このオードの小農民が、伝統的支配層から離れて異なる立場を表明したという情報はキャンニングにとどいてこなかった。とすれば、このような小農層に依拠してインド統治をうちたてることはできないことになる。

従ってキャンニングにとって英国側の力の限界を補うものは、インドの伝統的支配層に他ならなかった。「もしも、我々が賢明ならば、我々は時を移さず、より強くより実質的な紐帯で、インドの首長層・大小の地主・富裕層と我々とを結びつけなければならぬ」とキャンニングは判断した。今や「停止した力」となった英国にとって、インド支配の安定化の鍵は、インド人エリート層をいかに統治機構に包摂していくか、にかかっていたのである。

一方、ロンドンでは、リベラル派全体が深刻な混乱に落入っていた。それまで、政治改革の推進主体であったコブデンやブライトの影響力はすでに一八五〇年代には大きく後退していたが、クリミア戦争とインド大反乱のよびおこした排外的ナショナリズムは、それに追打ちをかけた。また、前述のように、宗教的な改革運動はインド人に対する聖戦的感情の中にあつた。さらに、一八三〇年代以来、「インド改革」を推進してきたウィッグ派の政策も、大反乱の発生によって混迷を余儀なくされた。

それまでウィッグ派知識人は、英国がインドを植民地化し「インド改革」を進めることを、インドが文明化しやがて独立していくまでの過渡的ステップと意味付けていた。チャールズ・トレヴェリアン(Charles Edward Trevelyan)は、一八五三年に、インドの教育政策を審議する貴族院の委員会ですら次のように証言している。即ち、彼にとって、インドはカナダやオーストラリアなどの白人移住植民地と同列に置かれたものであり、インドの改革が順調に進めば、インドは独立への道をたどることになろう、と述べている。さらに、たとえ遠い将来にインドが独立したとしても、その場合の英印間の経済関係は、アメリカ独立後の英米間の貿易と同様に、順調に発展していくはずであり、独立を妨げるべきで

はない、と論じている。⁽³³⁾ この中で、トレヴェリアンは経済に焦点をあててインド統治に伴う政治的な課題には十分な光をあてることなく、しかも、インド人が英国の「改革」を受入れるものと想定し、その「改革」の成果は英印双方にとって望ましい、という予定調和的な英印関係のイメージを前提としていた。しかし、このオプティミスティックな構図は、インド大反乱の発生によって大幅に論拠を失った。即ち、インド人は英国の「改革」政策を受入れず、しかも、「改革」の帰結は英印間の対決である、として保守党から攻撃されたのである。

トレヴェリアンの長年の盟友で、彼の妻の兄であり、一八三三年にインドの教育改革を立案したマコーレー自身、ウィッグのインド政策の破産を認めている。大反乱の報に接した議会では、保守党のエレンポローらが、反乱の力による抑圧、強力な軍隊、強力なインド政府を求め、これまでの「改革」的政策を手びかえ、キリスト教の布教を抑制するよう主張した。それに対して、グレンヴィルは従来のウィッグ派のインド政策を擁護した。⁽³⁴⁾ このグレンヴィルとエレンポローの討議を聞いて、マコーレーは、自分が支援すべきリベラル派のグレンヴィルではなく長年の政敵エレンポローに「ほぼ完全に」賛成し「グレンヴィルは彼が思っている通りのことを言っていないのだ。まちががなく、彼はエレンポローや私と同意見なのだ」と記している。ウィッグ史観の旗手であった彼は、かつては正反対のインド政策を主張したエレンポローに完全に同意せざるをえなくなったインドをめぐる状況を、日記の中で「狂った世界!」とさえ呼んでいる。⁽³⁵⁾

英国の先進性とキリスト教文明とに揺ぎない確信を持ち、その価値をインド社会に伝播させるならば、インドを文明化した社会に再編していくことが可能であるというオプティミズムは消え、それとともに、かつてダルフージがなしたように一切のエネルギーと情熱をその目標に注ぎ込むという姿勢もリベラルたちの中からは薄らいだのである。しかし、彼らのかかげた目標にかわるものは容易に見えなかった。

このように、リベラル派の政治家が二重思考に落ち入っている間に、世論のインドに対する関心は一層高まっていっ

説 論
た。しかも、新聞報道を通じて争点が形成された結果、トレヴェリアン、J・S・ミルら、それまでインド政策に重要な影響を及ぼしてきた知識人のサークルは、情報収集の面でも政策決定の面でも、かつてのような独占的な地位を失った。彼らのような中軸となる解釈者をもたないままに、インド大反乱という予期も説明も正当化も困難な異変に直面した世論は、激しく動揺し、様々な解釈が混乱したままに主張された。フランシス・ハッチンス(Francis Hutchins)の巧みな表現によれば、「インド大反乱は、英国があまりに多くのことをやりすぎた結果であり、あるいは、あまりに少しかやらなすぎた結果である。さらに、英国があまりに苛酷であったために生じ、あるいは、あまりに寛大であったために生じた」³⁶のである。そこで、まずスケープゴートにされたのは、前述のように反インド人感情が昂進していくと

いう実に「タイミングの悪い」³⁷瞬間に、英国軍に対して無差別の報復を禁じた「お情け深いキャンニング」であった。ところが一八五七年秋以降、戦局が英国に有利に向いはじめにつれて、キャンニングに対する非難は消え、それにかわる攻撃目標となったのは東インド会社であった。

インド支配が途方もなく大きな課題である点を、人々は共通に理解した。しかも、一世紀前にインド征服に着手し、その後インドを支配してきたものは東インド会社という少数者であったが、大反乱に見舞われた後インドの再征服が可能になったのは、国民的な支援があつたためであると、多くの人々は感じていた。とすれば、なによりもまず、インド統治を東インド会社のような少数者の手に担ねておくべきではなく、インドを英国国民の手のもとにしっかりつなぎとめておく必要がある、という議論は賛成を得やすかつた。政治指導者たちは、このような世論の動向を鋭敏に察知した。しかも、ヴィクトリア女王とアルバート公は、インド支配になみなみならぬ関心を示しており、彼らはその点からも何らかの対応を迫られていた。パーマストンは、一八五七年暮に東インド会社の廃止を決意し、クラレンドン(George William Frederick Villiers, the 4th Earl of Clarendon)に「それにかわつてどのような統治形態をとるべきかを

検討するように依頼し、内閣最大の課題として取組む姿勢を示した。³⁸ 他方、デイスレイリーも、すでに一八五七年一月にインド問題をトリー党が権力を掌握していくための「飛び石」^{ステンピング・ストーン}と位置づけ、「ウィック党が完全に失ってしまったインドにおける帝国の再建以上に、公衆の信頼を求めぬ根拠となり、国民の歓声をよびおこす栄光にみちた主張はありえない」と記している。³⁹ インド問題は政権担当能力の試金石となつていったのである。植民地支配の理念を欠いたまま、政党のこのような思惑は、東インド会社の廃止と「女王宣言」に決着していく、政治変動をつくり出していった。

ところが、このロンドンで決定された変化の影響は、インドにとつては象徴的なレベルに止まり、現地の統治構造や人事には根本的な変化をもたらしたわけではなかつた。「その偉大な帰結は名前の変化であつた」という、廃止された東インド会社の理事による皮肉な表現は、インド現地に関するかぎり適切であつた。それでは、なにゆえに一片の「女王宣言」が、英国のインド統治に一時代を画する政治的意味を持ちえたのであろうか。その理由は、キャンニングが大反乱の鎮圧の過程で、デ・ファクトに推進し、あるいは準備してきた統合の方法と、「女王宣言」⁴⁰とが、極めて適合的であつた点に求められる。換言すれば、「女王宣言」は、キャンニングの統治意図を、最上位の權威である女王の名によつて鮮明に表現する役割をはたしたのである。

異民族支配の最大の困難は、治者と被治者が言語的・文化的な障壁にへだてられ、相互の意志の疏通がさまたげられる点である。キャンニングは、「女王宣言」の發布を、華々しい祭典として演出したが、この政治的な意味はインドのエリート層には理解されても、「莫大なインド下層民衆には何の影響もあたえることはできない」⁴¹ことをよく知つていた。彼は、また「女王宣言」をインドの様々な現地語に翻訳させ、それを自らのインド統治の記念として大英博物館に寄贈しているが、その翻訳は実に一七種類に及んでいる。ここからもインド統合がいかに容易ならざるものであるかをうかがい知ることが出来る。このようなインド民衆を全体として掌握することに限界があれば、それだけ、彼は統治の柱となる伝統

的支配層・有力者・エリート層という薄い層をすくいとり、支配構造の中に包摂していく手段を工夫しなければならなかったのである。

デリーの陥落とラクノーの救出から一年を経た一八五八年秋にも、まだ反乱側の残存部隊の抵抗は続き、それに対する英国側の掃討作戦も依然続けられた。⁽⁴²⁾しかし、キャニングにとつては、なによりも反乱に政治的な終止符を打つ象徴的行事が必要であつた。しかも、大反乱がインド全域を震撼させた以上、インド全域に及ぶ終結宣言が求められたのである。

「その日（一八五八年一月一日）女王宣言は英語、及び、現地語で読み上げられる。場所は三首都及びプロヴァンス、即ち、アーラバード・カルカッタ・マドラス・ボンベイ・ラクノー・ラホール・アフガニスタンの山岳地帯の麓ペシヤワ・インダスの河口カラチ・イラワジの岸ラングーン。適切な祝砲とパレードを命ずる。役所は二日間休日。カルカッタとアーラバードでは街のかざりつけと花火（現地人に最適の催し）を行う。マドラス・ボンベイも同様。」⁽⁴³⁾

この英国支配機構を総動員した支配再建の祝典は、被治者の動揺を終息させ、キャニングが主導権を回復していく政治攻勢の第一弾であつた。そのために彼は、自らの手で「女王宣言」を使いやすい形に要約した。さらに、スタンレーへの手紙の中で「本心を言えば、見せもの騒々しさは、もうすこし少なくできればいいのだが、そうはできない」と述べていることから理解されるように、インド人の関心を引きつけるための演出を行った。そして、彼自身、「（女王が）信託をあたえた愛する従弟、初代のインド副王にしてインド総督」という「女王宣言」が規定している役割を演じきつたのである。

第二の政治攻勢として、キャニングは、一八五九年一〇月から五ヶ月間、及び、一八六〇年冬期の二度にわたり、長期間の巡幸を行った。その地域は、インド東部のカルカッタから西北部アフガニスタン国境のペシヤワまでの広大な地

域——反乱軍が疾走した全域を含む——に及んだ。彼は行く先々でダーバー(Darbar)と呼ばれるインドの伝統的な形式にもとづく謁見をくりかえした。そして、反乱鎮圧に功績のあつた有力者たちには、勳章や賞金、それにヴィクトリア女王の姿が刻印されたメダルなどを授与した。また、後継子がないために「失効原理」によって領地を失うことを懸念する藩王たちや、あるいは反乱中の反英的活動を理由に土地を没収されるのではないかと、疑心暗鬼に落ち入っている土地貴族に対しては、サナード(Sanads)と呼ばれる伝統的な形式の文書にサインして確信をあたえた。

副王が、直接に、しかも、インドの統治的儀式に則つて、インド人有力者に接した効果は絶大であつた。各地で、キヤニングへの謁見を求めて、遠方よりインド人エリート層があらそつてダーバーにつめかけ、その一帯はダーバーの話題でもちきりになつた。そして、他の有力者のうけた饗応や、接受の格式と比較し、英国側の自分に対する位置付けを確かめ、競争し、そして、嫉妬した。キヤニングはインド政治上でも例外的な巡幸の実施によって、支配者としての求心力をつくりあげること成功したのである。インド奥地への旅行は、場所によつて人間の肩にかつがれ、あるいはラクダの輸送力に頼つたものであり、多くの地点でテント生活が強いられた。この行程に同道したキヤニング夫人の目からは繰返される謁見は「退屈な儀式」にすぎず「空疎なショー」であつた。しかし、キヤニングのもとにつめかけるインド人の数の多さと彼らの好意的態度を見て、彼女も、「旅行は有意義で、成功した試みであり、苦痛に値するもの」と判断していた。

「ダーバーは大成功です。(ロンドンのあなたには)信じ難いことかも知れませんが、現地の首長たちは皆、総督の非常に気持ちの良い丁寧な謁見に魅せられています。私は、彼ら首長たちの目から見て、これまでと何が違っているのかを知りたくて、再三再四たずねてみました。それでわかつたのですが、彼らはこれまで、冷たく傲慢な仕方で接せられていたのです。……ラホールでは今、五百人もの首長が謁見を求めています。」

實際、インドの伝統的支配層から見れば、ダルフージーの併合政策からキャンニングの和解と現状維持の政策へと、英國の政策は一八〇度転換したのであり、彼らはその変容ぶりを副王キャンニングの行為から直接に感得することができた。当時、被治者の側に立ったはずのインド人から、キャンニングは「これまでのどのインド総督よりも我々の権利を確保し、ヒンズーの間に、近年大変動揺した英国統治に対する信頼を回復するための貢献が多であつた」と称賛されたことは、その事情を物語っている。

キャンニングの第三の、そして総仕上げになつた政治攻勢は、英国人統治者とインド人エリート全体に及ぶ称号とステータスの革命であつた。すでに、「女王宣言」によつて総督キャンニングは王冠の權威をインドで代表する副王となり、東インド会社の文官と軍人も、王冠に直結した官吏となつた。そして、大小の藩王たちも、女王の臣民となり、イギリスの直接統治下のインド人も、少なくとも形式的には、英国人と同等の臣民として平等の権利があると宣言された。さらに、「女王宣言」とキャンニングの巡幸は、大々的な論功行賞で飾られた。インド各地の統治責任者は、反乱鎮圧過程での貢献度や統治の補助者としての重要性に応じて、褒賞を申請するインド人のリストを総督のもとに送り、それにもとづいて叙勲のランクや接受の順序や格式などが決定されていつたのである。一方、ロンドンでは、キャンニングに伯爵の位を授け、ジョン・ローレンスやキャンニングらの功労者に大十字勲章を与え、両院議会はインド政庁高官を名指しで感謝決議を行った。さらに、ヴェイクトリア女王とキャンニングとの間で、インド統治に功労のあつた英国人とインド人支配者の双方を対象とする王冠護衛の騎士称号ナイトフットの新設が検討され、「女王宣言」発布三周年の一八六一年一月一日、キャンニングをグランド・マスターとし、九名のインドの伝統的支配者と九名の英国人よりなる「インドの星」(Star of India)の構成メンバーが発表された。⁽⁴⁷⁾

この体系的な恩賞の分配は、「女王宣言」とキャンニングの巡幸が呼びおこしたインド人のキャンニングから褒賞を得よう

とする無秩序な競争に対し、キャニングの側から彼らの序列を決定し、秩序化していくという政治的な意味を持つていた。彼らは女王に当てた手紙の中で、彼に謁見を求めてカルカッタにやってくるマハラジャたちの対抗意識や嫉妬心に手を焼いており、彼らには西欧における騎士団が前提としているようなメンバー間の平等意識や兄弟愛が欠如していることを指摘している。しかし、このようなインド人相互の対抗意識こそが彼らを王冠に對する恭順にむけて駆り立てていることも、女王に報告している。このインド人の分立状態こそが、キャニングの統治を安定させる必須条件であることを、彼は熟知していたのである。

このような王冠を中心とした統合政策は、後のデイスレイリーによる「国王称号法」(Royal Title Act, 女王^{クイーン}ヴィクトリアのインド女帝^{エンペス}就任。一八七六年)から大英帝国のクライマックスを象徴する「ヴィクトリア女王在位六十年式典」(Diamond Jubilee, 一八九七年)に至る帝国政策のプロトタイプと呼びうるものである。しかしながら、これら一九世紀後半の帝国政策が、英国人の人種的な優越意識に色どられ、帝国の力と栄光を誇示するものであったのに対して、キャニングの政策はインド大反乱という軍事的挑戦に對抗した政治的応戦であり、帝国の力の限界を前提としていた。そして、インド人エリートに対して権力を移譲し、あるいは、将来授権するという期待感を持たせることで、統合を目指していたのである。

大反乱とその後のキャニングの対応によって、それまで英本国の中で政治的な注目を浴びることが少なかったインドは、今や大英帝国の主柱と位置づけられるに至り、インドから見ればカルカッタはロンドンに次ぐ帝国の第二の首都とさえみなしうようになった。そして、巨大な領土を有する藩王たちも、版図の保全を保障されたばかりか、インドにおいて王冠を守る支柱と位置づけられた。また、英語教育を受けたカルカッタなど都市部のインド人エリートは、「女王宣言」の中の、人種、宗教のいかなをとわずインド政府の役職に受け入れられるという一節から、英国はインド人に対し

て平等の政治的権利を認めていく方向にあるという期待感を抱いた。実際、キャニングは、その期待に応えるべく、現地採用で非高等文官職についているインド人を、高等文官待遇の職に昇進させる努力を行い、さらに、ロンドンで行われている高等文官職の採用の門戸をインド人にも開いた。この二つの措置は英国人の高等文官の根強い反対を押し切つて決定されたものであり、後に、キャニングの意に反して、インド人が非高等文官から高等文官に昇進する道は、彼らによつて事実上閉ざされてしまった。しかし、この決定により、インド人エリートは統治機構に参入する期待感をさらに高めたのであり、若くて野心的なインド人が、高等文官試験を目指して、続々と試験地ロンドンに渡航していくという事態を引きおこしたのである。

キャニングは一八六一年初旬に、大反乱の中心であつたラクノーを訪問した。このラクノーを、彼はインド統治の再建モデルとみなし、一つの政治的実験を試みていた。それは、かつて英国支配の最も根強い抵抗者であつたタルクダールを、単に土地所有者と認定するだけでなく、政治権力の一部をも彼らに移譲し、植民統治の最も重要な支配機構である治安判事と徴税人の役職に彼らを任命するというものであつた。このインド有力者の植民地行政への編入という実験は、彼の目には成功しているように映つた。治安判事として熱心に活動してきた十六、七人のタルクダールと間近に会いし、キャニングは次のようにグレンヴィルに書き送っている。

「タルクダールたちの顔付きや挙動の変化を見てとることができ、本当に気持がよかつた。……連中は、胸をはり、堂々と歩き、正面を見て、微笑をたたえ、自信をみなぎらせ、あたかも生れて以来の廷臣でもあるかのように、部屋に入ってきた。一八ヶ月前には、彼らはこそこそと忍び歩き、下を向き、まるで不吉を予兆させるかのような卑劣漢の顔をしていたものだった。しかし、彼らは信任されており、また、彼らの権威に対し英国人からも現地人のすべての階級の人

からも敬意を表わされるようにするのだという私の意向を、疑問の余地なく感じとれたことにより、連中は一人前になったのだ。職務の中で示した彼らの正確さと公平さは、⁽⁵⁾ 実に目ざましい。」

彼は、この実験の成果を手離して評価していた。しかし、自分のつくりあげた間接統治型の支配に対して、キャニングが満足感に浸っているとき、彼の目にふれない所でこの支配体系は自己矛盾を示しはじめていたのである。

(1) Malik, Salahuddin, Nineteenth Century Approaches to the Indian "Mutiny", *Journal of Asian History*, VII (1973) pp. 95-127.

(2) Seeley, J.R., *The Expansion of England*, (London, Macmillan, 1931) p. 10.

(3) Fitzmaurice, op. cit., I, p. 244.

(4) Buckle, op. cit., IV, p. 98.

(5) 一八四九年にロイター通信社が設立されて海外ニュースが豊富になり、一八五三年に広告税が、五五年に印紙税が廃止された。その結果、新聞の低価格化が可能になり、『デイリー・テレグラフ』の創刊、『マンチェスター・ガーディアン』の日刊化、など新聞は新しい読者を開拓しながら、急速に発行部数を伸ばした。インド大反乱の政治争点化がこのような新聞の拡大期に行われたことは、争点の形成に大きく影響した。Granfield, G.A., *The Press and Society*, (London, Longman, 1978) pp. 204-11. Parkin, Harold, "The Origin of the Popular Press" in *The Structured Crowd*, (Sussex, Harvester Press, 1981) pp. 47-56.

(6) 例えば、Woodruff, Philip, *The Men Who Ruled India*, Vol. II, *The Guardians*, (London, Jonathan Cape, 1963) pp. 25-43, p. 65.

(7) Kaye, John W., *Christianity in India*, (London, 1859) p. 497. Metcalf, op. cit., pp. 108-09 に引用。

(8) Kingsley, F. E., *Charles Kingsley: His Letters & Memories of His Life*, Vol. II, pp. 34-35. Hyam, Ronald, *Britain's Imperial Century: 1815-1914: A Study of Empire and Expansion*, (London, B.T. Batsford, 1976) p. 72 に引用。

(9) Finlayson, Geoffrey B.A.M., *The Seventh Earl of Shaftesbury, 1801-1885*, (London, Eyre Methuen, 1981) p. 448. グレンヴィルは、日記の中で「シャフツベリーは國中のファナティシズムをかき立て、インドにおけるキリスト教の解放と呼ぶようなものを叫びたてている」と非難している。Ibid., p. 464. に引用。なお、ヴィクトリア初・中期の英国では、女性の偶像化が進んでおり、そ

のような女性を異教徒が「虐殺」したことの衝撃は大きかった。

(10) *Ibid.* pp. 447-54.

(11) Pinner, Thomas, (ed.), *The Letters of Macaulay*, Vol. VII (Cambridge: Cambridge University Press, 1981) p. 103.

(12) 一八五七年九月三〇日の演説。Buckle, op. cit., Vol. IV, p. 99.

(13) Bolt, Christine, *Victorian Attitude to Race*, (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) pp. 158-63.

(14) 大反乱に巻き込まれなかった南インドや、あるいは反乱発生の危険性があるながら反乱の波及しなかった北インドの地域では、英国人行政官の反乱に対する意味づけが、実際に反乱を体験した人々とは微妙に食い違っている点に注目する必要がある。

(15) Edwardes, Emma, (ed.), *Memorials of the Life and Letters of Major General Sir Herbert B. Edwardes*, Vol. II, (London, 1886) pp. 267-68. Metcalf, op. cit., p. 102 に引用。

(16) Disraeli to Stanley, 13 Aug. 1858. Buckle, op. cit., IV, p. 168.

(17) Moore, R.J., *Sir Charles Wood's Indian Policy, 1853-66*, (Manchester: Manchester University Press, 1966) p. 118. とくにウッドは、一八五四年のインド教育改革法の提案者であったが、その草案の重要な部分をアレキサンダー・ダフに依存しており、そのような経緯からも、聖職者からの圧力に弱かった。*Ibid.*, pp. 108-17.

(18) Canning to Frere, 1 Nov. 1860. MacLagen, op. cit., p. 50.

(19) Frederick J. Halliday (Lieutenant-Governor of Bengal) to Canning, 23 Feb. 1858. Metcalf, op. cit., p. 101.

(20) Cotton, Sophia Anne, *Memoir of George Edward Lunch Cotton*, (London, 1871) p. 105. Metcalf, op. cit., p. 101.

(21) インドにおける英語教育とキリスト教の布教は、若いヒンズー知識人たちにとっては、宗教的な挑戦に他ならなかった。そのうちでも平等思想の及ぼした衝撃は深いものがあった。しかし、彼らにとってヒンズーは宗教であるばかりでなく社会規範と生活様式そのものであり、キリスト教への改宗は、カーストの喪失など社会生活全般に影響を及ぼす革命的な変化を意味した。従って、改宗に伴う社会的コストが極めて大きかったことは容易に理解できる。また、幼年期より様々な経典に接して、教義についての知的訓練を受けていたヒンズー知識人にとって、キリスト教の教義は彼ら自身で解釈し、ヒンズーの教義と対比し相対化することが容易であった。そのため、キリスト教の影響を受けても、それがただちに英国人司祭の精神的支配化に入ることを意味せず、教義の解釈権をめぐる対立が、すぐさま発生した。このような要因が重なりあって、ヒンズー知識人の大多数は、改宗するよりは、ヒ

ンズーの改革運動や新興宗教であるブラーモ・サマジ(Brahmo Samaj)などに共感を寄せるに止まり、キリスト教への改宗が、アフリカのいくつかの地域のように飛躍的に進むことはなかった。

このように、インド知識人が植民地化にともなう西欧化の衝撃を、宗教的なレベルの挑戦と受け止めてそれに応戦していった一八五〇年一六〇年代に、英国では「世俗化」の波が押しよせていた。鉄道網の完成、巨大な工場と工業都市、大衆新聞の登場など、一八五一年のロンドン万国博に象徴される新しい社会においては、倫理規範の問題は聖書では覆いきれないのではないかと、という意識が広まった。つまり、信仰が深いことと、規範を持つこととの乖離がいやおうなく感じられはじめた。神の手から独立した自然界の法則性の追求(ダーウインの「種の起源」)や非宗教的である自由の擁護(Ｊ・Ｓ・ミルの「自由論」)は、ともに一八五九年に出版されている。そのために、インド知識人の宗教レベルでの問かけに対して、英国人知識人が宗教のレベルで正面から再応戦することは、当時の知的な状況にそぐわないために、充分に行われたとはいえない難かった。Chadwick, Owen. *The Secularisation of the European Mind in the Nineteenth Century*, (Cambridge University Press, 1975). Neil, Stephen. *A History of Christian Missions*, (Harmondsworth, Penguin, 1964) pp. 356-66, 397-408. Bolt, op. cit., chap. V. Low, D.A., *Lion Rampant*, (London, Frank Cass, 1974) chap. 4. Oddie, G.A., *Social Protest in India*, (New Delhi, Manohar, 1979). Kopf, David, *The Brahmo Samaj and the Shaping of the Modern Indian Mind*, (Princeton, Princeton University Press, 1979), 参照。

- (22) Metcalf, op. cit., p. 95-98. Best Geoffrey, *Mid-Victorian Britain: 1851-75*, (London, Weidenfeld and Nicolson, 1971) pp. 170-97. 一八五七年にインド大反乱の発生につき神に懺悔する国民的な日が設定され、クリスタルパレスには二万五千人の会衆が集った。しかし、そのような熱気は一八六〇・七〇年代までは継続しなかった。

- (23) *Dictionary of National Biography*, Sub. nomine, III, p. 870.

- (24) Canning to Granville, 17 June, 1861. Fitzmaurice, op. cit., Vol. I, p. 386. 彫像のデザイン案は、ブリタニア像(大英帝国を擬人化した女性像で、普通は兜・盾・三叉の矛で身を固めている)に代えられ、しかも兜ではなく喪を象徴するイトスキの花輪をかぶり、矛ではなく十字架を持ったものにされた。「護民官の精神」を表現することは、政治的にも美術的にも困難であったのである。Granville to Canning, 10 July, 1861. *Ibid.*, pp. 397-98.

- (25) Woodruff, op. cit., Vol. II, p. 38. に引用。

- (26) Ludlow, J.M., *British India: Its Races and Its History*, Vol. II, (Cambridge, 1858) p. 348. Pemble, op. cit., p. 215. に引用。

(27) *Ibid.*, p. 220.

(28) 当時、インドの鉄道建設は着手さればかりで、軍隊の移動は、ほとんど馬に依存しており、移動速度は限定された。ただし、英国側は、インド全域に四五五マイルに及ぶ電信網を有していたことは戦略的に重要であった。なぜならこの通信体系の助けをかりて、英国側は広大な北インドで体系的な作戦を展開することが可能であったからである。それは、各地に分立したまま全インドの見通しを欠いて拡散していった反乱側と著しい対照を示している。

にもかかわらず、各戦線では英国側は量的劣勢の中で戦いを強いられた。例えば、二ヶ月間のデリー攻撃において、英国側の三人の最高司令官は相次いで倒れ、四人目の司令官アーチダール・ウィルソン (Archdale Wilson) も消極的で指導性を発揮しえず、三四歳のジョン・ニコルソン (John Nicolson) がウィルソンより指揮権を実質的に奪いとって、作戦を立案し、実施した。さらにこのニコルソンまでが戦死し、司令官ウィルソンは再三再四、デリー総攻撃を中止しようとしたほど激しい戦いであった。Trotter, Lionel J. *The Life of John Nicolson: Soldier and Administrator*. (London, Thomas Nelson, 1897). 及び Sen, S. N. *op. cit.* 参照。

(29) Metcalf, *op. cit.*, p. 227. また、インド大反乱に対する対応に英国が忙殺されて、その他の地域を植民地化する余力に乏しかったことと、インド統治に伴う莫大なコストが明らかになったために、インドに匹敵する領土と人口を持った中国やトルコを植民地化することには消極的な見方が決定的に強まり、それが一要因となって、一八六〇年代の英国の海外膨張は比較的抑制気味になったと考えられる。

(30) Canning to Edmonstone, 23 Nov. 1859. Metcalf, *op. cit.*, p. 224.

(31) Pemble, *op. cit.*, p. 240.

(32) Metcalf, *op. cit.*, p. 224.

(33) Clive, John, *Macaulay: The Shaping of the Historian*. (New York, Vintage Books, 1975), p. 409.

(34) *Hansard*, 3rd Series, CLIV, 71-74.

(35) Pinner, *op. cit.*, VI, p. 221.

(36) Hutchins, Francis G., *The Illusion of Permanence: British Imperialism in India*. (Princeton, Princeton University Press, 1967) p. 80.

(37) バーマレストンの表現。Jasper, *op. cit.*, p. 641.

- (38) *Ibid.*, p. 644. クラレントンは「バーマストンは戦争を政治資産にできるような観点からみている」と述べている。
- (39) Buckle, op. cit., p. 100.
- (40) く・ロリー・ローリントン (Henry Rowlinson) の言葉。Berce, George, *British Attitudes toward India*, (London, Oxford University Press, 1961) p. 240. に引用。
- (41) Maclagen, op. cit., p. 226.
- (42) ヒマラヤ山岳地帯に近接する地域などで、抵抗を完全に沈黙させることは難しく、散発的でゲリラ化した抵抗は反乱から一〇年間も続いた。
- (43) Canning to Stanley, 19 Oct. 1858. *Ibid.*, p. 226.
- (44) *Ibid.*, p. 376.
- (45) Lady Canning to Granville, 1 Feb. 1860. Fitzmaurice, op. cit., I, pp. 365–66.
- (46) Maclagen, op. cit., p. 314.
- (47) Victoria to Canning, 18 May, 1859. Canning to Victoria, 4 July, 1859. *Ibid.*, pp. 282–87.
- (48) *Ibid.*, pp. 283–85.
- (49) *Ibid.*, pp. 297–98. Spangenberg, Bradford, *British Bureaucracy in India, Status, Policy and the I.C.S. in the Late Nineteenth Century*, (New Delhi, Manohar Book, 1976) pp. 308–09. Gordon, Leonard. A., *Bengal: The Nationalism Movement, 1876–1940*, (New Delhi, Manohar Book, 1979) pp. 1–37.
- (50) Canning to Granville, 3 Mar. 1861. Fitzmaurice, op. cit., p. 394. 回し手紙の中に、キャニングは各地の首長が彼の総督の任期をさらに五年延長するようウイクトリア女王に請願したことを満足気書き添えている。

キャニングは、インドに赴任する直前の一八五六年八月、ロンドンにおいて未知のインドに対する暗い予感を次の様に表現していた。

「我が英国領インドにおいては、地球上の他のどの土地よりも、私たちに対する神の祝福はうつろいやすく、不確かな状態にあることを忘れてはならない。今、インドの空には一点の雲もないようであるが、やがて人の手のひらほどの小さな雲がポツリとあらわれ、やがてどんどん暗雲がたれこめ、ついには私たちを圧倒し、破滅に追い込むことを忘れてはならない。一度生じたことはもう一度生じうる。不穏な事態はたしかに消え去ったかもしれないが、完全に払拭されたわけではないのである。」¹

この言葉は、その後の大反乱を適切に予測しているが、キャニングがインドを離れる時のインドにおいても、かなりあてはまるように思われる。なぜなら、「鎮静化」が完全になしとげられたかに見えたインドで、新しい不安定の要因が育まれつつあったからである。

キャニングの支配体系は、様々な点ではころびを見せはじめていた。なによりも、在印英国人の多くは、キャニングが要請した統治者としての倫理を遵守しなかった。英国の支配力の限界が明白である間は、キャニングが「護民官の精神」を掲げて権力行使を自制することは説得力があったが、再度統治が安定化するのに伴わない、彼の和解政策は、在印欧人社会の心に深く浸透したインド人に対する人種的な嫌悪感の前に、空洞化していった。若い高等文官や婦人達の間にもインド人を「黒ん坊^{ニガ}」と呼びすてにする口調が広まった。一八六〇年にインドを旅行したチャールズ・ディルク（Charles Dilke）は、彼の泊ったホテルにはすべて「お客様には使用人を御殿りになりませんようお願い申し上げます」

という揭示が見られたという。²⁾このような支配民族の暴力行為は、枚挙にいとまがなく、民間人が官吏かを問わず、街頭や列車の中にまで広がった。

しかも、最も公正であるべき裁判官までが、人種的偏見をあからさまに表明しさえした。例えば、一人の英国人判事は、一八五九年に訴訟の最中に、すべてのベンガル人は捏造者だと発言し、陪審員に対しインド人の召使いを殴り殺したヨーロッパ人の刑を寛大にするよう要請する有様であつた。このために、この判事はベンガル人社会から憤激を買つた。その同じ判事は、英国人のインディゴ・プランターの暴虐ぶりとそれを擁護する英国人官吏の腐敗を、ベンガル人農民の目から批判したベンガル語の劇「ニル・ゲーパン」(Nir Gapan)の英語訳の出版をめぐる事件が持ちあがつたが、その翻訳者を告発した裁判を担当することになった。その中で、彼は、キャニングから「見苦しい」と評されるほど露骨に人種的偏見を示す訴訟指揮を行つた。それに対して、ベンガル人たちは、彼のリコールを求めた二万人にのぼる署名をキャニングに提出したのである。³⁾

キャニングは、行政の長官であるインド総督は司法に介入すべきではなく、裁判官に対する譴責はロンドンの大法官(Lord Chancellor)の権限であるとして、ベンガル人たちの追及をかわした。そして、この判事について「この男は、判事としてはこまりものだが、悪い人間ではないのだ。ただ、自惚れで気持がいっぱいになっており、野卑な喝采に溺れるたちで、(現地の言い方によれば)頭の中を風が吹きまくっているという輩なのだ。」⁴⁾と評している。この件に対するキャニングの対応からは、大反乱発生の時にみられた戦鬪的ともいえるほどの治者の倫理意識の観点からの主張は後退し、在印英人に対する諦念さえ感じられる。インディゴ・プランターの横暴に対する農民の抗議運動が、キャニングの予測をはるかに超えて組織化されたことに対して、彼は、「デリーの反乱の日々以来の憂慮を感じた」と述べ、「このよ
うな運動を、地道に、しかも知的に展開しうる民衆は、個々の人間としては弱く無抵抗かもしれないが、団結した場合

にはどんなに注意深く対応してもしすぎるといふことはない」と危惧をつのらせていた。このような危機意識とは裏腹に、彼は総督の任期後半においては、在印英国人の人種主義を放置している。実際彼の在印欧人社会に対する態度は、彼らから「別人のようだ」と言われるほど軟化していた。支配者の差別意識こそが、被治者を連帯させることを知りながら、彼はそれに対して有効な手立てを打たなかつたのである。

高等文官たちの間でも、一八三〇—四〇年代のような統治の確信ヤトチイと使命感は薄れていた。一九世紀後半の傑出したインド高等文官アルフレッド・ラル(Alfred Lyall)は、それを「私はインド民衆のために何事かを成したいと願ってきた、それが私がこれまで試みてきたところでもあつた。しかしながら、私にとって現地人たちに同情に近い感情をもつて接するための心の支えとなる信念、つまり、インドを文明化するという大事業に対しては、どうしても潜在的なペシミズムを禁じえない」と表現している。インド統治における確信の時代は終り、懷疑と被治者に対する超越感、そして支配のシニシズムがしのびよりはじめたのである。キャンニングは、この点に気付いていた。

「英国人がこれまで現地人に抱いてきた共感は、一般的にいつてインド人に対する満足した仲間意識から敵対感情に変わった。ここでは、ほとんどすべての人が、はつきり不満を言い、インドに留まってインドのことに配慮することに嫌気がさしている。こういった感情は不可避的に現地人の側にも同様の反応を生じさせている。」

在印英国人社会は、インド人社会から隔絶した閉鎖社会を形成した。しかも、それは夏期の間すべての行政を移動させる避暑用の行政都市ヒル・ステーション(ダージリン Darjeeling とシムラ Simla)の生活が象徴するように、支配者のための支配に流されていった。英国の中産階級は、インドでは支配者として振舞い「インスタント貴族」に社会的地位を上昇させた。そして、服従を調達していく方法も、キャンニングが試みたようなインド人エリートに権力を分与することによって統治機構に編入していく方式よりも、バターナリズムが好まれることが多くなりはじめた。それは、キャンニングが警戒してい

たジョン・ローレンスの影響下にあるパンジャブ派が台頭しはじめたことにあらわれている。⁹⁾ 実際、キャンニングが統治の実験として期待をかけ「私がインドに背を向ける(彼のインド総督辞任を指す)前に、インドの貴族制を英国支配のために有用ならしめる」と力を注いできたタルクダルたちは、キャンニングの期待した通りには機能しなかった。彼らは、英国から広大な領地を授与されたが、そこに住む下級所有権者や自営農民の抵抗にあつて、その領土を充分にコントロールしえず、また、莊園の経営者としても無能であつた。そのため現地の英国人行政官は、彼らにビジネスの初歩を教え、有能なスタッフを紹介するなど悪戦苦闘を重ねなければならなかつた。彼らの大多数は、英国行政の水準から見ると「文盲」に近く、「インドにおける土地貴族の新時代」と呼ばれた間接統治方式の基盤づくりは前途多難であつた。¹⁰⁾

六年間にわたるインド統治の終盤、とりわけ最後の一年においては、キャンニングの緊張の糸は緩んだように思われる。重要な決定は、腹臣のフリアラ部下の判断にゆだねがちになり、グレンヴィルとの通信の主たる関心も、インド総督の後任人事やロンドンの政界情報に移り、それまで發揮されてきたインドの政情へに対する鋭敏な反応は、うかがえない。さらに、最後の半年間は、心身の疲労が色濃く見えはじめた。

任期終了まであと四ヶ月になつた一八六一年一月、妻シャーロットがマラリアで急逝した。毎土曜日、彼は妻の墓に詣でている。二人の間には子どもはなかつた。翌六二年に入ると、離任を送別する宴が続いたが、彼の健康も損われていた。離印の折に、キャンニングは「青ざめ、弱々しく、疲れはて、悲しみにやつれた表情であつた。たしかに眉と額には威厳がそなわつていた。しかし、数々の礼典の際に彼の顔に輝いていた光は失われ、血の気が失せていた。」¹¹⁾そして、ロンドンに到着するほとんど同時に死の床につき、一二日後の一八六二年五月一七日に死去した。¹²⁾ この間、彼は、見舞いに來たグレンヴィルにもウッドにも一切インドに関することを語らなかつたという。享年 四十九歳。

- (1) Maclagen, op. cit., p. 21.
- (2) Hyam, op. cit., p. 226.
- (3) King, Blair B., *The Blue Mutiny: The Indigo Disturbance in Bengal, 1859-1862*. (Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 1966) pp. 203-12.
- (4) *Ibid.*, p. 211.
- (5) *Ibid.*, p. 169.
- (6) Strangenberg, op. cit., p. 66.
- (7) Woodruff, op. cit., II, pp. 38-39.
- (8) Hutchins, op. cit., p. 108.
- (9) エリック・ストークスによれば、「パンジャブ派の統治スタイルの本質は、軍事征服の雰囲気（その後の統治に）延長させる名人芸の中にある。即ち、仰天し途方にくれる人々のうえに、瞬時のうちに力によって進んだ文明による統治の諸要素を押しつけてしまうことである。そして、帝王のような威圧は、もう一方で、被支配者の伝統的な慣習に対して敬意を払い、パースナルな関係にもとづく支配や温情主義をとる」ことによつてやわらげられるのである」。Stokes, Eric, *English Utilitarians and India*. (Oxford, Oxford University Press, 1959) p. 268. パンジャブ派の総帥ジョン・ローレンスは、「一八六三年よりエルギンの後任としてインド総督となるが、彼は「インドは静寂だ。火薬のように静かだ」と語つたといわれる。Woodruff, op. cit., II, p. 233.
- (10) Maclagen, op. cit., p. 299.
- (11) Metcalf, Thomas R., *Land, Landlords and the British Raj: Northern India in the Nineteenth Century*. (Berkeley, University of California Press, 1979) p. 239, 289, 291, and *passim*. オールドにおけるキャンニングの試験は「そこで訓練を受けた英国人植民地官僚（「オールド学派」）によつて継承され、北ナイジェリアなどアフリカの間接統治に適應された。Law, op. cit., ch. 2, "Empire and Traditional Ruleship." 参照。
- (12) Temple, Richard, op. cit., p. 230. Maclagen, op. cit., p. 307. に引用。
- (13) マクラーゲンによるとキャンニングの死因はアメーバ赤痢と肝臓障害の併発症である。一般的に、インドでの死亡率は本国に比べて著しく高かった。クライスト・チャーチ出身のインド総督のトリオ、ダルフージは離任後四年の一八六〇年、キャンニングは離

任直後の一八六二年、そしてエルギンは在任中の一八六三年に、各々死亡している。キャニングが「ガレー船の奴隸」(S.D.P. 50)と形容したインド総督の激務と酷暑は、英国人支配者に対して苛酷であった。

The Official Mind of Imperialism:

Charles Canning and the Indian Great Rebellion

Ken'ichi NAKAMURA*

The Indian Great Rebellion produced fierce reactions among the British in India as well as in Britain. The religious leaders such as Charles Kingsley and Shaftesbury found themselves thrown into a state of serious moral confusion. The missionary societies regarded the Rebellion as a lesson the morality of the Empire. Most of the reformist movements were silenced and they often cried for revenge.

The Whig intellectuals who had commanded the policies of Indian reform forfeited confidence among public. Thomas Macaulay was severely shaken by the outbreak of the Indian Rebellion and found no alternative but to agree the Tory's Indian Policy. Both Palmerston and Disraeli understood that the confidence in their leadership of Queen Victoria and the general public was at stake. So that both of them proposed the plans for the transformation of the Indian Government.

But the decision to abolish East India Company in London had no great impact on the governmental structure on the spot. The restoration of British Rule was practically done by the Governor-General's initiatives.

Firstly, Canning made the full use of the Queen's Proclamation. Making the translations into 17 vernacular languages, he issued it upon 1 November, 1858 to Indians about the coming of the Queen's direct rule with salutes, parades, illuminations and fireworks at all the important cities of Indian Sub-continent.

Secondly, the Viceroy made an Imperial progress through upper India in the winter of 1859/60 and 1860/61 with the promulgation and gift of local distinctions and prices. He gave solemn letters and special concessions to traditional rulers which could successfully arouse the enthusiasm for British Rule.

But the cause of British Rule was lost to Canning well as Whig leaders. Canning's successful restoration of the British Empire ironically became a proto-type of the British imperialism of Tory party, especially, that of Disraeli.

* Associate Professor of Hokkaido University